

人は環境をつくり  
環境が人をつくる  
キーワードは  
MOH (もおっ)

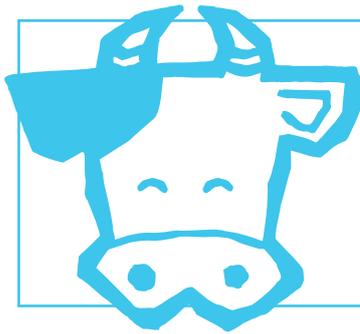
**M** → もったいない  
他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

**O** → おかげさま  
人は一人では生きられない、環境によって生かされている

**H** → ほどほどに  
欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

# M・O・H 通信

1号  
2004  
June



「M・O・H」のマーク = 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします

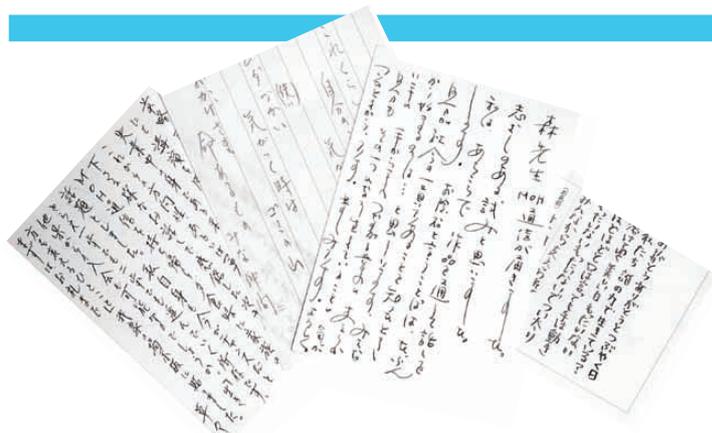
## 目次

- 「MOHの会って何?」…… 1
- 細江区まちづくり講演会…… 3
- 「耳に届く言葉は、な-に?」●今関信子…… 5
- 「環境倫理とは」●本田裕志…… 7
- 「始めは辛抱が肝心」●森建司…… 9
- 「県大MOHの会」●県立大学…… 11
- 「見ることと聴くこと」●辻村耕司…… 13
- 事務局ニュース・本の紹介…… 14
- お知らせ、募集、編集後記…… 裏表紙



## 投稿コーナー

MOH俳句の投稿と葉書による感想をいただきました。ご紹介します。



- 「ありがとう ありがとう」といふやへ日
- 「私たち 誰の力で生きていくのか」
- 「溶けてゆく 美しい白もったいなさ」
- 「ほどほど」といふ言葉も手は動き
- 「もったいなさ」
- 「もったいなさ」
- 「もったいなさ」
- 「みんなから 支えられて人は生き」
- ◆辻村咲姫 中圭町高校生
- 「これへらら」 自分へのやと気がつかず
- 「ムダづかい」使ひ
- 「気がつく時毎」「ミ」の「E」
- 「おかげさま 命あるものみな仲間」
- ◆章野勉 長浜市会社員

前略 京都キャリア交流プラザにて講演を聞かせていただきました。現在、失業中の身である私にとって、もの考え方これからの方向性、あるいは勇気を与えてくれた様なお話で感銘した次第です。「MOH通信」を持ち帰り、夕食時に家族の話題としました。私自身も今がチャンスだと捉え一歩でも二歩でも進んでいく所存です。「生き方を変える一言」我が家の掲示板にはりました。

◆井原進 宇治市

「MOH通信」が届きました。志のある試みと思いました。私は、あちこちで、作品を通して話をします。おかげさま、ということでは、多分自分が社会の一員であることを知ったときから、始まるのでは…と、思っています。見えぬ手に、手から手へ、つながる業に支えられ、自分もその一つになり、生きていくことに気がついたときから、尽くす。楽しみにです。

◆今関信子 守山市作家

『若波講座 地球環境学』第十巻第4章に収録されている加藤二郎氏の論文「環境と倫理」中の批稿(第十章)と同様の考え方から、価値観の転換と環境倫理の確立の必要性を説かれていますが、この中で加藤氏は、確立されるべき環境倫理のキーワードとして、「循環・共存・抑制」の3つをあげています。このキーワードは、それぞれ「もったいなさ(M)」「おかげさま(O)」「ほどほどに(H)」と完全主としてその精神において一致しています。加藤二郎氏は、厚生省環境庁の要職にあった人で、退官後は、世界で最も権威のある環境問題の定期刊行物として知られる『地球白書』の日本語版の鑑識に携わり、現在は「環境文明研究所」の所長をされている方です。

◆本田祐志 京都市 助教授

『哲学研究所  
M・O・Hの会』って何？  
©しみずやすお





たといえは  
この鼻輪！

ケチったり  
するだけじゃ  
ないと思っんです

だからと  
言って  
無駄を  
なくしたい

チャリッ

失敬！

ブリンッ



この鼻輪は  
父からもらった  
物です

父は祖父から  
もらったと  
言っていました

大切に使える  
長持ちする  
だけでなく

父は祖父の  
思い出や  
温もりまで  
感じ取る事が  
できます

そー言った事を  
皆で目指す…  
それが  
『MO・Hの会』です



人の話を聞いて  
感想を述べ

自分の人生  
生き方を  
考える…



そして  
『MO・Hの会』で  
グループを  
作り

講演…  
ディスカッション  
します

どー思うよ？  
ねけ  
合っかねーよー



『MO・Hの会』に  
入会しませんか？  
大切にしましょう  
限りある地球！

それをまとめ  
発行し  
将来的には  
「生きる哲学」  
シンポジウムや  
生活者の  
言葉を集めた  
本も出版して  
いきます！



いろんな立場の人や  
年令の違う人の経験や  
考え方に  
聞く耳を持ち

心も身体も  
健康な人間に  
なる為に  
感動する心や  
行動力を  
養います！

平成16年度細江区まちづくり講演会

# 自分の生き方を決めたひとこと

講演／循環型社会システム研究所 代表 森 建司  
龍谷大学助教授 本田裕志 先生

■平成16年4月3日(土)  
■びわ町細江公民館



4月3日滋賀県びわ町細江公民館で「平成16年度細江区まちづくり講演会」が開かれた。テーマは「自分の生き方を決めたひとこと」。M・O・Hの会より、森建司代表と、龍谷大学助教授の本田裕志先生が講演した。地域住民の方が80名ほど参加してくださった。熱心に取り組んでくださった。講演内容は次のとおり。

## 森建司

### お天道さまが見てはるで

皆さん、こんばんは。私は今、もったいない、おかげさま、ほどほどに、を社会哲学として広めていこうと、「M・O・Hの会」を勧めております。

現在は、経済至上主義が蔓延し、自由な社会ではありませんが、やってはいけないこと、守らなくてはならないことの常識を判断する力に欠けているのではないかと私は昔から言われていた「お天道はんが見たはるで」という言葉を心に刻むことが必要だと思えます。

子どもへ虐待をする親、テレビゲームに洗脳される子どもや大人、を見ていますと科学万能の反動ではないかと。死を科学で分析したり、臓器移植を発達させることも大事ですが、「自分の死をいかに捉えるか。親鸞上人の教えの中に後世を知るとは、説教を聴く事ではなく、称名念仏が仏恩報謝の行である」と教えています。つまり手を合わせ、「極楽に連れて行ってください」と仏やお天道さまに願うことが大事といっているわけです。これも一つの哲学だと思えます。

何か願うということは、「天の道に反することをしてはいけない、いつも何か自分が見ている（これは自分の良心かもしれません）」「ということを自分に植え付けていることなのです。どういいう気持ちを持って生きてゆくか、を子どもたちに考えてほしいものです。

## 廃棄物になる日

北欧では、自動車の登録税が180%と聞きます。ヨーロッパに行きましたらにもに200万円を払う、300万円かかるというわけがびっくりしました。ところが、現地では「車が増えすぎないのでいいんですよ」「税金は福祉に使うからみんなのためになるのだ」というんです。循環型志向の国は違うと思えました。湖北では、有機性汚泥を使ったバイオマスガス発電を検討しておられるようです。牛から多量に出るメタン菌を利用して、有機性汚泥をバイオマスガスにして

熱利用するというシステムです。これは、原子力発電に比べると、格段に高い。しかしこれが、廃棄物を利用した産業となるのです。循環型社会を想定するとき、無くてはならないものではないでしょうか。

## 龍谷大学助教授 本田裕志先生



### 哲学とは 人間いかに生くべきか

哲学、倫理学って「何なのか？」と学生からも聞かれます。皆さんも難しいものと思っておられるでしょうね。そうなんです。哲学は簡単に説明できないんです。哲学を論じるときには、「なぜ？」と思うことが大切なんです。「人生いかに生きるべか」「自分の生活をどう営むのか、自分の方向性はどこのか。どのような人生にするのか、を筋道立てて考えること」です。

哲学のなかでとくに倫理学は、行動の仕方を考える。今この瞬間、しようと思えばいろんなことが出来る。しかし、無意識の中で、選んでるんです。日々の行動を、一瞬一瞬選んで続けて、日常になりそれが積み重なって人生になる。そして私たちは、この人生を長い目で見て幸福なものにしようとして、その時々行動を選ぶ。でもなにを頼りにして選ぶのでしょうか。ゲームや軍事に関することは利害や損

得で選べますが、友達、身内、相手のあつて選ぶのはそれはいきません。何に基づいて選ぶのか。常識ではないでしょうか。かつては、常識に従って考え、生きてきました。ところが、それが頼りにならない時代を迎えています。

かつては、安全な人生を送りたければ、親や先祖の教えを守り、道徳を守り常識に従っていけば、間違いなかった。ところが世の中や環境がこれほど変わると、親の人生や教訓は古くなる。周りの人に習っていると一人前になれない。いまや、自分で生き方を作る時代です。心の中の想いが大切になっていきます。

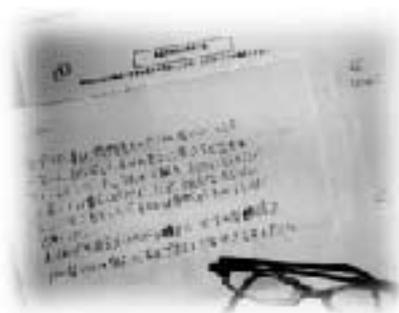
世の中の常識は頼れない。行動し、決断することが難しくなっているといえます。自分で考える状況をいかに作るか。「生きたい生き方を追求することは、大切な魂」ではないでしょうか。

暑さ寒さに弱く冷暖房が欠かせない、必要もないのに車を取り回す、こんな現代人には心の中に「自分で稼いだお金を好きに使って何が悪い」という思いが潜んでいます。

他人や社会の迷惑にならないければ、何をしてもよいという倫理感、稼いだだけ稼いで、欲しいものを欲しいときに、欲しいだけ手に入れるのは勝手だし、いいことだという経済的自由。それが現代社会の常識でした。しかし、そこには、環境破壊を通じての未来や他生物への重い負担、という落とし穴が潜んでいます。

モノの豊かさ、友達、携帯電話、メール、見直したいことはいっぱいあります。「何をしたら良いか、悪いか」を一人一人が自分なりに、真剣に考えるパワーを培う、社会の仕組みづくりが急務です。

持続可能な社会構築に必要な価値観は「循環、共存、抑制」であると、加藤三郎氏は著書「岩波講座 地球環境学」で述べています。まさしく、「もったいない、おかげさまで、ほどほどに」なのです。



講演終了後、「あなたの心に残る一言を書いて下さい」と皆さんにお願いをしました。55名もの方に、提出していただきました。今回は「生き方」に関しての一言をご紹介します。

【生き方】28人

●高度成長時代にみんなが踊らされ、わずか30年ほどの間にこのような時代にしてしまった。今、ようやく気がついた。これからは、襟を正してしっかり取り組まなければ…男

●「二人で仲良く、健康で生きていけば良い」

この言葉は結婚に迷っている時、父から言われた言葉です。この言葉に背中を押され、主人と結婚しました。健康で仲良く生きられ、今の家庭があると思っています。

●「人に後ろ指を指される事はするな」

当たり前なのですが、人が見えない時でも悪い事はしない…川崎正代 女

●「いたわり、思いやり、献身の心」

(息子たちに伝えたい)  
世の中自分一人ではない。相手を想う気持ちがあれば、明るく住みよい素晴らしい世の中になる。お互いが寄り添って”人“と言つ字は成り立っている。家も仲間も同じ。…高橋勲 男 63才

●「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」

(子ども、孫に伝えたい)  
先祖を大切に、旅行をしたら、先祖にお土産。頂き物はお供えする。…女 62歳

●「気にせなかったらいいやんか」

姑の言葉に文句をいったとき、息子に言われた一言です。少し反省しました。…女

●「あるがままに」

ストレスの多い現在。常識が通用せず、心のありよう、自分の考え方の置き所が不安定です。自分らしさを失わず、背伸びをせず、自分の能力の範囲で精一杯生

きることに、それが「あるがままに」です。”モノ“の豊かさ”心“の豊かさは反比例する、と考えていました。両立できるようにしたいものです。…川崎 四朗 男 54才

●仕事に追われ、便利な生活に慣れ、楽をしてしまう癖が付き「消費は美德」にどっぷりつかっています。このごろ世の中がおかしくなっていると思う。今一度原点(昔)にかえり、スローライフを心がけたい。…女

●「親の顔に泥をぬるな」(子や孫に伝えたい)

若い頃、夜が更けても家に帰らない私を心配して、探しに来てくれた父に言われた言葉です。親に心配をかけた時、恥をかかせるようなことはしないでおこうと思いました。父の思い出の一言です。…太和田美千恵 女

●①人のために、人の喜ぶことをする

●②人を愛すれば、自分も愛される

●③ととのえる”とは自分を正すこと

●④すべてのものに命がある

●⑤先祖に感謝(自分が今、存在するということ)…女 60才

●人は目でなく、心を通す…男

●進取創造 温故知新 感謝：森善昭 男

●目標意識の喪失 苦勞をしない(知らない)感謝をしない(知らない)↓孫達に



●現在の社会は何時どうなったのか判らないが、道徳心が無くなった。自分の考えが中心になり、他人のことに感心が無い。世の中を再度見直し、豊かな心を持つ時代を希望する…男

●「みんな違うから、それがいい」

●「目にも感謝の気持ち」

●「私たちは人生の瞬間瞬間を、その時の自らの常識、社会の常識に基づいた選択を繰り返すことで生きている」

●「お残しすると目がつぶれるよ」「食べ物粗末にすると、まんまんちゃんがメンシヤはる」

●「山(川、畑)の神様ごめんさい」

●「お残しすると目がつぶれるよ」「食べ物粗末にすると、まんまんちゃんがメンシヤはる」

# 「耳に届く言葉は、 なーに？」

今関 信子

散歩の途中、雨に降られた。変な雨で、ざーっと来て、すぐあがった。雲が切れて、日が射したので、私は、濡れた服を乾かそうと、肩先を指でつまんで持ち上げた。その時だった。はっとしたのは。

すっかり忘れていた臭いを嗅いだのだった。少女の時嗅いだ臭いだった。嗅いだとたん、忘れていた日々が一気に浮き上がってきて、私は面食らった。その時、聞こえた気がした。「人間、もちつ、もたれつ。」少女の日、たびたび耳にした言葉だった。

思い出した景色は、戦後の、ようやく落ち着きを見せ始めた路地である。路地の一角に空き家があった。ある日、そこに、女の人と女の子が引越してきた。遊びに行くと喜んで迎え入れてくれるおばちゃんは、いつも優しくかった。男の人がたまに来た。女の子のお父さんである。その人が来る日、子どもは外に追い出され、おばちゃんは、ほんのり頬を染めて戸を閉めた。

一年が過ぎようとした頃、女の子は小児麻痺にかかって、歩行が出来なくなった。その頃から、男の人が来なくなった。おばちゃん

は、洋裁学校に通うことになって、乳母車に乗った女の子が、いつも私の家の庭にいるようになった。母が、預かったのだろう。おばちゃんは母の顔を見ると、「すみません」と言った。口癖のように。そして、ていねいに頭を下げた。そんなときである。その言葉を聞いたのは。「人間、もちつ、もたれつ。」当時、私は小学三年生だった。私は、誤解した。(お母さんたち、もちの話をしている。もたれるって言ってるもん) 私は、餅が好きだった。二人の間に漂う空気も、何とも言えずほっかりしている。私は、この空気ごと覚えた。大好きな言葉として。大きくなって、誤りは訂正され、私の中に生きる言葉になった。

母は関東大震災で親族を失って、親戚で育てられたそうだ。学校に行きたくても行けなかったから、文字は新聞で覚えたと言った。辛い事もたくさんあったようだ。その母の口癖が、「人間、もちつ、もたれつ」だった。この言葉を母は、いつ、どこで覚えたのだろう。時代が、その言葉を活かしていたのは確かだ。私は、言葉は、時代の中で生きるのではなく、か、と考えている。その時代の価値観やそ



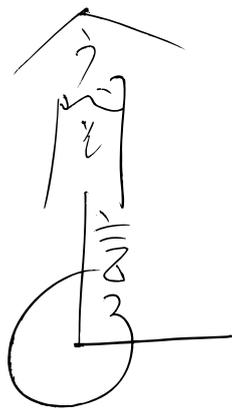
イラスト：佐々木洋一

の社会の精神などを栄養にして、かもしだす空気を呼吸して、だれの耳にも届く言葉になるのだ、と。

人の心に長く留まり、人に影響を与える言葉はどんな言葉なのだろう。ある人にとってそうなる言葉が、ある人には流れて消える言葉になるのは、なぜなのだろうか。

言葉が時代の中で生きるとすれば、時代を超えて生きている言葉は、時代を超えた価値観に裏付けされた言葉だろう。

ときどき時間を作って、聞こえる言葉に耳を傾けるのも、面白いかも知れない。そして、この時代と向き合つのも悪くない。



いませきのぶこ ● 1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

主な著書／「小犬の裁判はじめます」1987年 童心社。青少年読書感想文コンクール課題図書

「七よならの日のねすみ花火」1995年 国土社。青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財

「地雷の村で」『寺子屋』1997年 2003年 P H P 研究所 など多数

# 「環境倫理とは」

## 本田先生の倫理学講座 Part.1

本田 裕志

昨今、いわゆる環境問題が深刻さを増すなかで、その解決のためには倫理学や哲学の視点が必要だ、と言われています。「環境倫理」という概念や、それを研究する「環境倫理学」という学問もすでに登場しています。けれども、「哲学」や「倫理学」や「環境倫理」とは、そもそもどのようなものなのでしょうか。また、どうしてそのようなものが、環境問題への対処のために必要なのでしょうか。

### ■倫理とは？

私たちにとって「倫理」というものが問題になるのは、私たち人間の持っているある特質のためです。それは「各々が自分のありかた、生きかた、行動のしかたを自分で選ぶ」ということです。道端に転がっている小石は、自分で選んでそこにそうしているわけではありませんし、動植物もその生活や行動のパターンは、生まれつきプログラムされた能力と周囲の状況とによって、ほとんど決まっています。けれども人間、たとえばこの私は、大学で研究と教育に携わる生活を送り、その一環として今ここで、この文章を書くという行動をしています。これは可能な無数の生活や行動のなかから、私が自分で選んだものです。このような選択の能力こそは、人間の特質（人間性）の重要な一要素であり、私たちの人生がどういふものになるか——幸福な、望ましい人生になるか、それともその逆になるか——は、人生の全瞬間における私たち自身のこの選択の積み重ねにかかっています。

ですから私たちは、日々の行動をただ行き当たりばったり、やみくもに選ぶわけにはいきません。望ましい人生に導く適切な行動を積み重ねるためには、何か選択の拠り所となるもの、つまり行動の適・不適（善悪や正・不正）の判別基準が必要です。私たちは通常、そういう基準として、世間の常識・社会通念・慣習（しきたり）などと呼ばれるものを用います。これは道徳（モラル）や作法（マナー）といった行動規範に体系化されたり、より厳密にルール化されて規則や

法律の形をとったりもしますが、要は「しかじかの場合に人々は普通どのようふるまうものなのか」についての、世の中の共通の了解事項なのです。私たちは、こういう出来合いの基準をあまり深く考えることなく受け入れて、それによってその時々自分の行動を選択したり、他人の行動の善悪や正・不正をあげつらったりしており、また大抵はそれで事が済むのです。

しかしこの出来合いの基準は、いつでも必ず頼りにできるわけではありません。私たちが複雑な具体的現実のなかで、常識や通念に頼ってどう行動するかを決めようとすると、たとえば「お客をだまして商品を売らないと借金が返せない」といった、「あちらを立てればこちらが立たない」式のジレンマに、たちまち陥ります。また、常識や通念はいったん身につくと、凝り固まって柔軟さを失いがちですが、科学技術の急速な進歩などによって目まぐるしく変化しつづける現代社会では、そういう常識や通念はすぐに新しい状況に適応できなくなり、行動選択の基準として役立たなくなってしまうます。さらに、戦前の（またことによると今の）日本のように、世の中全体が間違った考え方に囚われ危険な動きをしているときに、世間の常識に従い人々と同じように行動していたのでは、自分も周囲と同じ過ちを犯し、世の災いを招く集団行動の片棒をかつぐことになってしまいます。ですから心ある人なら誰でも、常識や通念や既成の道徳に囚われずに、もっと確かな、きちんとした筋道に従って、自分がどのように生き、行動すべきかを考える必要がある、と感じることがあるはず。倫理とはまさにこの筋道、つまり「私たちが自分の生きかた・行動のしかたをそれに従って選択・決断し、また自他の生きかた・行動のしかたの善悪や正・不正をそれに従って評価する、既成の常識を超えた確かな筋道」のことを言うのです。

### ■倫理学とは？哲学とは？

倫理学とは、この倫理について研究する学問です。したがって、倫理学を学ぶことは、私たちの人生や行動がどうあるべきかについて、一般に受けいれられている答えを鵜呑みに

# むだいずむ

© しみず やすお



応用が、きかぬ男に  
マニュアルなんて必要なし!

せず、自分の頭で考えぬいて、まだ与えられていない、真に確かな答えを求めて探究することです。それはいわば、私たちの生きかたの前提となっているものを批判し、問題にするという知的活動なのです。

私たちは、生活し行動する場合にも、物事を考えたり認識したりする場合にも、何らかの前提の上に立ってそうするのが普通です。たとえば経営者は、「企業を経営して収益を増やすことはよいことである」という前提に立ち、どうしたらそれを最もうまく実現できるかを考えて、そのように行動します。また自然科学者は、「宇宙の中のできことはすべて合理的法則によって説明できる物質現象である」という前提に立ち、個々のできごとを既知の法則によって説明したり、未知の法則を発見したりすることに努めます。けれども、この前提そのものが妥当かどうかは、不問のままにしています。もし誰かが、「企業を経営して収益を増やすことは本当によいことか」「宇宙のできごとは本当にすべて合理的法則によって説明できるのか」という問いを立てて考えるなら、その人はもはや経営者として、自然科学者としてではなく、哲学者として、経営哲学・自然哲学の問題を考察しています。このように哲学

とは、私たちの生きかた、行動のしかた、ものの見かた、考えかたなどのあらゆる方面で、その前提とないっていることを問題にし、より根本的な真実を明らかにしようとする知的活動です。そして倫理学は、哲学の一部門として、人間の生きかた、行動のしかたの前提を問題にする学問なのです。今回は、倫理・倫理学・哲学とはそれぞれ何か、また私たちにとってなぜそれらが必要なのかについて述べました。次回は、環境問題に直面する現代世界において、この必要性がとりわけ切実なものになっている事情についてお話ししたいと思います。

## 本田 裕志

ほんだ ひろし 1956年東京都生まれ。京都大学文学部哲学科を卒業後、東京大学で修士課程修了。現在は、龍谷大学文学部助教授。専門は哲学・倫理学。

主な著書／塚崎智・加茂直樹編『生命倫理の現在』世界思想社  
加藤尚武編『環境と倫理―自然と人間の共生を求めて』有斐閣  
アルマ(共著) など多数。

# 始めは辛抱が肝心

～晴れて社会人になられた皆さんへ～  
「丁稚奉公ってご存じですか？」

森 建司

この不況に苦しむ厳しい経済環境の中、首尾よく就職された皆さん。或いは志し敗れ、無念のフリーターの道を進まれる皆さん。(勿論、当初からフリーターの道を選ばれた人も) このような困難な時代に挑戦して、それを乗り越えていく貴重な体験をされました。この体験がきつと皆さんの将来にとって大いに役立つことになるだろうと思います。

これからは好むと好まざるとに関わらず、親の庇護を離れて単独で社会の荒波にもまれていくこととなります。そして今まで経験されたことの無いような局面にもしばしば出会うことでしょう。それぞれ違った家庭に育ち、異なった躰や環境にいたのですから一概には言えないと思いますが、これからの人生を逞しく生きていくためには、進むべき道や方向が違っててもこの第一歩がその修行の第一歩である事は間違いありません。

昔の事を言うようではいささか気が引けますが、私の社会生活第一歩は高校を卒業して東京の日本橋の繊維会社に丁稚奉公したのが始まりでした。と言うと随分昔の事のように思われるかもしれませんが、今から僅か(?) 五十年ほど前の事です。当時は商売の後継ぎをする者は、丁稚奉公と決まっていたし、娘は嫁入り前の行儀見習いで女中奉公をする事は、かなり一般的な慣習でした。

日本橋を勤め先に選んだのは、当然ながら近江商人の店で、そこで教えられた事を書けばキリの無い話です。例えば、そこでは店の間で私たち丁稚が寝ていて、起き抜けに掃除道具をもって店の掃除に掛かります。朝一番に人より早く箒をもって掃きはじめるのが要領の良い仕事の出来る者だと初日に教えられたのですが、次の朝、勝負はすべについていました。と、言うのは『仕事の出来る者』は何と寝るときに箒とともに寝ていて、起きたときには既に箒を抱えて掃き始めていると言う次第でした。のんびり育った私は、起きるのが一杯で、先輩を「近江商人もあかんようになったもんやなあ」と嘆かせたものでした。(因みにその箒とともに寝ていたのは『越後商人』の子孫でした)

こうして始まる一日は新しい経験の連続でした。夜遅くに店の女中さんの指示で後片付けを終えると、漸く二十番目ぐらいに風呂の順番が回ってくるわけですが、そんな大勢の入った残り湯に入る事もビックリしましたし、また忙しいさなかに番頭の背中を流すというのも驚きでした。

番頭さんの大きな背をささくられた手で洗っていると、情無い気持ちになるものです。そんな時「何で背中を流さしてるか分かるか。お前ら学校出は角(かど)だらけや。その角(かど)取って一人前に成るように仕込んでいるンやぞ。笑って



イラスト：佐々木洋一

「べえーい」というてみイ」

そのころ覚えた言葉に「辛抱・根性・気配り」と言うのがあります。

「世渡りは辛抱が肝心。何があってもひとときの辛抱や、じつと堪えなあかん。人間辛抱していると根性が出る。少々叩かれてもへこたれず頑張っで立ち上がるそんな根性が出るンヤ。そうやって世の中で苦勞していると人間の”幅”言うもんが出来てきて、人への思いやりが出来るようになる。それを気配り言うのや」とまあこんな具合であります。

知識は人に科学や技術を与えてくれました。それによって人類には大変な進歩がもたらされました。その偉大な成果を目の当たりにして人々の価値観はなかなか変わらないものであります。しかし、あなた達自身が逞しく生きていく為には、こういう苦勞や挫折に耐え抜いた中で培われていく「人生への思い」を一日も早く確立して、自分のものにしていく必要があると思うのです。

ご健闘をお祈りします。

本林 建司

もり けんじ ●1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会常任幹事、滋賀県教育委員会委員など  
著書／吃音はななる 遊タイム出版

# の会

## 滋賀県立大学MOHの会

■平成16年1月22日(木)

■滋賀県立大学にて



MOHの会のスケジュールに目を通した時、まず飛び込んできたのが始まりの挨拶。名前の欄には井田とあった。「えっ私??」これが、滋賀県立大学MOHの会の少し不本意なDEBUTであった(笑)。

参加のほとんどは、身内、というか同じサークルに所属する後輩・先輩。学生13名に加えMOHの会の創始者である森会長、事務局の辻村さんを滋賀県立大学にお招きした。

18時を少し過ぎたところで、始まりの挨拶。「今日は皆さん、参加ありがとうございます。」何を言ったら良いものかと困り果て、後は何を言ったのやら(反省)。「これから何が始まるんだろう」と、緊張する子や、真面目に聞こうとするばかり、面持ちが堅くなる人。私もいささか不安を覚えてしまった始まりでした。辻村さんから、この会の趣旨や始まった経緯などの説明が資料に添って行なわれた。ただ、それは決して形式ではなく、自分たちでMOHの会というものをどんな形に持って行くかを手助けする事前準備。あくまで、形式には拘らないという姿勢が、辻村さんの言葉からは感じとられた。さて、会が始まれば、「森会長ワールド」。その濃厚な顔立ちから、力の入った威厳ある言葉は学生たちの緊張感を煽るところか、それを集中力に変えてしまったようだ。ほっ、とした私は会長の話に合槌を打てる余裕が出てきた。そんな中、学生に目を向けなかったことがある。いつものサークルの場では、「哲学」なんてもの一つだって出てこない。今、会長が話している、お婆さんの話みたい誰かの気持ちを揺さぶるような話をしている訳でもないし。いや、哲学なんて難しい言葉はカモフラージュだ。サークルの

場だって同じようなことがあるのではないかと。例えば、それはほんの些細なことでも、その時何かを感じても次の日には忘れてしまっているだけじゃないのか。

私は、小学校の学童保育の子供たちと遊び、そこで何かを学ぼうというサークルに所属している。ある小学校へ行ったときのこと。一緒に遊んでいる子供たちの中で、学童保育に属していないある女の子がいた。学童に入っている友達のお母さんが迎えに来て、その子はまた帰れなかった。他のメンバーは学童保育の先生がたとミーティングをしているのに気付き、その子に、「一緒に中に入ろう」と誘うと、その女の子は、「私は学童保育に入っていないから」と寂しそうにいった。また、こんなに幼い子が、一人ぼっちで寂しさを我慢しようとする姿に胸が締め付けられる想いがした。それに比べて、私はどんなに周りに甘えているのだろう、と。

森会長の話が終わり、MOHの会も終焉を迎えようとした頃にやっと自己紹介。「じゃあ、名前と学部とチャームポイントを」良かれと思って言ったのに、後で学生に相当怒られた。県大MOHの会の主催者でした。自己紹介では、いつもの調子で何も話せない子や辻村さんからの「この大学を選んだ理由は？」の問いに真剣に答える子、何はともあれ和やかな雰囲気でした。ディスカッションとまでは行かなかったものの、一つのMOHの会の形が見て取れたように思うのでした。

(文責 県大MOHの会 井田秀美)

# 卓大M・O・H

## ★参加者の言葉



M・O・Hの会に参加した方々は、どんなことを感じたのでしょうか？普段から気にかけていない何気ないことでも、自分の言葉にしてみることは、難しいものです。

循環型社会を作るのは、単一の視点だけでは形成できません。色々な分野の人たちの思想・思いを形にしていくなきゃなりません。そのことを踏まえて、何を感じ、何を学んだのか、参加した方々から言葉をもらいました。

循環型社会について思想的、哲学的に考えたことが今まであまりなかったので、M・O・Hの会に参加したことが良いきっかけとなりました。

今、社会に必要とされているのは哲学などの、倫理観だと思います。私は物事をもっと現実味を持ったものとして感じられたらと思います。それは難しいことではあるけれど、すべての問題はそこから来ているような気がするからです。環境問題にしても戦争にしても、そこで自分がしたことが何をまねくのかを考えるべきだと思います。それは現代においては考えられなくなっているところがあり、私もそうだと思います。だからどうすればいいのか、考えなくてはならない気がしています。

循環型社会の形成にしても、環境問題の解決にしろ、知識を得ることだけでは解決できない。知識だけで解決するのなら、とくに解決している。例えば、廃棄物の処理方法は、知識の向上により、改善されていっても、排出量は、知識では改善できない。これは、知識ではなく、「ゴミを出す人の意識の持ち方に関係することだ。これからは、知識改革より、意識改革が環境問題を考えていく上で必要だ」と思う。

森会長のように、いへんになっても働いてやる姿勢は素晴らしいと思います。

学生が年配の方にお話を伺う機会と言えば講義くらいで、座談会的な場は珍しく貴重に感じました。循環型社会を目指すというテーマなのに、それを疑うくらい内容は日常の話題で、少しほっとしました。環境問題の原因はどうか、こういう取組みをすれば解決するかと分かったところで、灯台下暗し。一人一人が豊かな生活のためには何か必要か知るべきとおもいました。





# 見る・聞く・聴く

辻村耕司

写真は永源寺町政所の茶畑、有名な政所（まんどころ）茶の産地です。室町時代に「永源寺」により薬用としての茶を栽培するために植えられたという歴史を持つところ。山と清流と民家、懐かしい日本の風景が残っています。このような素晴らしい風景に出会える喜びは格別です。花や風景、自然を撮影する人たちが多くなっています。写真はモノ（被写体）の表面を写すことしかでませんが、ときには、撮影者はそのモノの深層まで入り込み、共鳴し、一瞬を切り取り、見るものに感銘を伝えることができます。

さて、現代は映像の時代、テレビを始め、新聞や雑誌、街中のポスターや看板と文字やら映像やらが目飛び込み私たちを刺激します。ロラン・バルト（フランスの批評家1915〜80）は「中世は聴覚の時代であった。それに対して、我々が生きている近代は視覚の時代である」と書いています。

山折哲雄氏（元国際日本文化研究センター教授）は

中世の人々は神とか仏の存在を目で見よつとはせずに、耳で聞き、心で感じようとした。ところが、顕微鏡や望遠鏡が発明されるようになると、それらを通して見えるものだけが存在し、見えないものは存在しないという考え方が出てきた（中略）。中世の時代は耳で確認できた神が、目に見えないが故に存在し

ないと大きく軌道修正されてしまった。それが近代である、と、解説されています。「宗教の力」日本人の心はどこへ行くのか、PH P新書

私たちは何を失い、何を手に入れてきたのか。木や岩や水、地球の声に耳を傾けなくなった私たち。自然との一体感を失った私たちは、ゆえに花や風景にひきつけられるのかもしれない。



つじむら こうじ ●  
1957年滋賀県生まれ。関西学院大学を経て、写真家として活動。  
主な著書／「比叡山を歩く」「滋賀の花12ヶ月」山と溪谷社

# むだいずむ

© しみず やすお



雑巾は、古タオルを縫えば完成し、買う必要なし！



★「M・O・Hの会」が新聞で紹介されました  
3月21日付けの京都新聞に『循環型社会語り合う会結成』というタイトルで紹介されました。



★「循環型社会における哲学を考える会」発起人会を結成

人が環境をつくり環境が人を創る“Mもつたない(他の命を奪って得たものを使わせて頂く) ○おかげさま(人は一人では生きられない、環境によって生かされている) Hほどほどに(欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために)——を理念とした、略称「M・O・Hの会」の発起人会を立ち上げる。

組織は ①人生哲学部門 ②経営哲学部門 ③政治哲学部門からなり、月例公開研究会開催、公開セミナー・シンポジウムの開催、定期刊行誌「M・O・H通信」の刊行、出版事業、個別ビジネスモデル実現支援、他団体との交流、理念に沿った人材育成、などを事業とする。事務局は循環型社会システム研究所に置く。今後の予定は第一回発起人会を経て、経営哲学研究会、政治哲学研究会、生活者M・O・Hの会を開催する。M・O・H通信は偶数月に刊行の予定。

★バイオビジネス創出研究会第3回基本講座開く

3月5日バイオビジネス創出研究会(事務局/循環型社会システム研究所・滋賀県びわ町)の第3回基本講座が、長浜市の臨湖で行われた。講師にイムカ・アメリカのエグゼクティブディレクター、八木博氏を迎え、「バイオベンチャー概論」と題した、アメリカ・シリコンバレーの現状と実績をレクチャー。オーダーメイド医療の事例を聞いた。シリコンバレーでは、人が財産となっており、研究に没頭できる、開かれた環境で、世界の研究者が集っている環境にある。日本人の優秀な研究者も数多く滞在し、ネットワークを作り、より開かれた研究土壌をつちかっている。日本に期待することは、開放的な器を作り、己を知って学習することが必要だそう。

同研究会では、アメリカ・シリコンバレーの視察とBIO2004の見学会を企画。6月7日の予定。

## 本の紹介

●環境と倫理〜自然と人間の共生を求めて〜  
加藤尚武編 有斐閣  
ルマ刊 1680円  
(税込み)



近年、急速に注目された「環境倫理学」。鳥取環境大学学長で日本の倫理学をリードする加藤尚武氏の編集による。自然の価値を認識する必要性、自然と人間との関係を、10章に分けて、論じている。本田裕志氏も参加している。

●マンガでわかる最新ポストゲノム100の鍵  
野島博著 石田まき絵  
(株)化学同人刊2100円(税込み)



左ページに解説、右ページにマンガがあり、わかりやすい。登場するタロウ猫が可愛く、遺伝子、DNA、ゲノムが身近に理解できる。生命の設計図(ゲノム)を解明したあとに来る「ポストゲノム」を学んでみよう。

●地雷の村で「寺子屋」づくり〜カンボジアひとりNGO・栗本英世の挑戦〜  
今関信子著 P・H・P研究所刊 1365円  
(税込み)



近江八幡出身の栗本英世さんがカンボジアで貧しい子どもたちを支援する様子を、守山市在住の作家今関信子さんの視点で捉えた、体当たりドキュメント。両氏の苦悩と現地の様子が生き生きと描かれている。秀作。

あなたもM・O・Hグループを  
作りませんか？

仲間を集めて下さると、講演とディスカッションをいたします。詳しくはお問い合わせください。

●問い合わせ先は、下記「M・O・Hの会事務局」まで

《8月号予告》

7月中旬発行予定

特集：親子を考える母の座談会

講演：全国市議会議員研修会

長浜みらい産業プラザ講演

第1回エネルギー環境高度化セミナー

大阪府工業協会講演

ほか

連載：作家 今関 信子さん「聞こえた声」

龍谷大学 助教授 本田 裕志氏

森 建司氏

挿絵：佐々木 洋平氏

漫画：しみず やすお氏

写真：辻村 耕司氏

記事：お知らせ、ニュース

ほか



「編集後記」

人がふと本気になるとき：人はどんなとき本気になるんだらうか。死に分かれて悲しいとき。目的が果たせず、俺は駄目だ！と絶望したとき。馬鹿にされて怒るとき。そういう本格的な本気は別として、日常の暮らしの中で、ふっと本気になるとき。それは人が本気を出しているのを間近で感じたとき。その本気に感動したとき。そんな時、つい、涙ぐんでしまう。

今関信子さんの「耳に届く言葉は、なに？」の……その

頃から、男の人が来なくなつた。……で、ふっと本気になった。「建」

★なんだか、携帯電話って便利だけど、mailしただけ、会話か……無い。私だけ？

いまだときの高校生は、携帯に自分の気持ちをいれてるから携帯見れば、その子が判るんだって。なんだからなあ。昔、学校に残って、くだらないことで、友達と話し合ってた。懐かしいな。「夢」

《M・O・Hの会》入会受付中！

あなたも「M・O・Hの会」に入会なさいませんか。3000円で、会員になれます。会員特典として、M・O・H通信、会員交流会、講演会のご案内をいたします。ご近所お誘い合わせの上、ご入会ください。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、ご意見をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

キリトリ線

《M・O・Hの会》入会申込書

フリガナ		年齢	
お名前			
住所	〒		
電話		FAX	
メールアドレス			
あなたの心に残った一言を書いてください。			

「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」の  
発足に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」を設立する。

M・O・H通信 Vol.1

2004年5月20日発行

●編集・発行/循環型社会システム研究所 M・O・Hの会

M・O・Hの会事務局

循環型社会システム研究所(新江州(株)内)

代表 森 建司

編集長 辻村 琴美

〒526-0111 滋賀県東浅井郡びわ町川道759-3

TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8181

email: tsujimura@shingoshu.co.jp

[入会費振込先]

M・O・Hの会 代表 森 建司

●滋賀銀行 普通 817 136987

●長浜信用金庫 普通 002 0577468